Osaka Medical College Hospital News
大阪医科大学附属病院ニュース
2019年7月
vol.57
発行
大阪医科大学附属病院

●病院理念●
社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに良識ある人間性豊かな医療人を育成します。
ホームページ　http:// hospital.osaka-med.ac.jp

新任のご挨拶

小児科 診療科長　芦田 明

平成31年4月1日付で前任の玉井浩診療科長のあと、大阪医科大学附属病院小児科診療科長に着任しました芦田明と申します。私は昭和63年に本学を卒業後、小児科に入局し、小児の腎臓病を専門に診療・研究に研鑽を積んでまいりました。

当院小児科は、私が専門とする小児腎臓病学をはじめ、血液、神経、循環器、内分泌、心身症、消化器、新生児、膠原病、アレルギーとほぼすべての小児疾患の専門領域を有し、小児に生じるあらゆる疾患に対して、高度でかつ専門的な治療を行うことができる体制を構築しています。小児心臓血管外科や小児外科などの外科系診療科をはじめとする小児関連各科との連携を密に取りながら、病気の子どもの治療が当院にて完結できるよう全力で小児疾患に対応しています。

我が国では少子高齢化が叫ばれる中、子どもは社会の宝であり、子どもの健やかな成長は、社会に共通した願いであると考えます。子どもたちの健康と健やかな成長に少しでも寄与できるよう、大阪医科大学附属病院小児科をさらに発展させるべく精進してまいります。

今後とも、我々小児科をよろしくお願い申し上げます。

腎臓内科 診療科長　美馬 晶

平成31年4月1日付で腎臓内科科長に就任いたしました。一言ご挨拶申し上げます。

腎臓内科はどのような人が受診するところなのでしょうか

蛋白尿、血尿といった尿検査異常から腎炎、ネフローゼ、慢性腎臓病、糖尿病性腎症、末期腎不全、透析療法などの腎疾患全般、さらに膠原病・血管炎などの特殊な疾患まで幅広い診療を行うところです。腎臓の機能が障害されても、はじめのうちは自覚症状が現われないため、放置すると、症状を自覚する頃には透析が必要な状態になっていることもあります。尿所見に異常がある際には自覚症状がなくても腎臓内科を受診し、適切な時期に、適切な治療を受けることがまさに肝“腎”なのです。

当院腎臓内科の特色

- 慢性糸球体腎炎については必要に応じ腎生検を行い、組織に基づいた診断と治療を行います。特に頻度の高いIgA腎症については扁桃摘出・ステロイドパルス療法を積極的に行っています。
- 慢性腎臓病(CKD)、糖尿病性腎症については食生活習慣の改善とともに集学的治療により腎予後の改善だけでなく、心血管イベントの抑制も目指します。新規糖尿病治療薬による腎保護効果について検討を行っています。
- ネフローゼ症候群だけでなく腎臓病は難治性浮腫を合併することがありますが、新規水利尿薬により浮腫管理が可能になりました。本薬剤の使用経験も当科は豊富です。
- 常染色体優性多発性嚢胞腎やファブリー病など一部の遺伝性腎疾患については新規治療薬が開発されており、当科での治療が可能です。

当科では医局員一同、地域の先生方と緊密な連携をとることで地域医療に貢献するとともに大学病院としての最先端、最良の医療を提供できるよう粉骨砕身努力して参る所存です。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

看護部長　中山 サツキ

今年度4月1日に看護部長を拝命いたしました中山サツキです。就任後一ヶ月で元号も令和に改まり、これからの時代に対応した質の高い看護を患者さんに提供していくという覚悟を新たにしております。当院には高度先進医療を担う病院として安全で質の高い医療を提供することが求められていますが、看護部では「患者中心のケア」という理念を大切に皆さまの信頼が得られるよう誠心誠意、努力してまいりたいと思います。

当院の看護におきましては、患者さんとの信頼関係を築くために「6つのS」を意識することをモットーにしています。Smile（笑顔）、Sincerity（誠実）、Study（学習）、Smart（賢明）、Speedy（迅速）、Specialty（専門性）を念頭に置きながら、日々の患者さんとの関わりを大切に看護していきたいと考えております。

体制の面では、より専門性の高い知識と技術をもった専門看護師・認定看護師による看護外来や看護相談などをいっそう充実させ、さまざまなチーム医療の現場において医師をはじめ他職種との協働による質の高い医療に積極的に貢献していきたいと思います。

皆さまのご期待に応えられる質の高い安心安全な医療を目指しつつ、患者さん目線でその思いに寄り添う看護が提供できるような風土を醸成し、自身の職責をしっかり果たしてまいりたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

がんゲノム医療

ゲノム（遺伝情報の全体の総称）情報や各種検査情報をもとに、患者さんの体質や病状に適した「医療」を行います。

がん医療総合センター センター長　内山 和久

みなさん、こんにちは。“ゲノム医療”という見出しを新聞記事やテレビなどの報道各所で目にするようになりました。ゲノム医療とは、個人の「ゲノム情報（ゲノム：遺伝子をはじめとした遺伝情報の全体に対する総称）」や各種検査情報をもとに、その人の体質や病状に適した「医療」を行うことをいいます。具体的には、質と信頼性の担保された種々の検査結果・医療情報を用いて診断を行い、最も有効な治療、予防及び発症予測を行っていきます。

がん薬物療法の急速な治療成績の向上が注目されていますが、これは、21世紀に突入しさまざまな領域での技術革新の結果と考えられます。特にがん薬物療法の領域では、1）分子標的治療薬、2）がん免疫療法の臨床導入が、治療成績の向上、もっと言えば進行がんであっても長期生存が追求できる可能性をもたらしたと言えるでしょう。

近年がんの発生、増殖、浸潤、転移に関わる遺伝子が判明し、特に直接的に関わるものをドライバー遺伝子と呼んでいます。このドライバー遺伝子を中心にがん細胞の有する遺伝子に応じた有効な抗がん剤を選択していくのかが個別化医療の要となり、ゲノム医療推進の主軸とされてきました。

現在まで個別化医療における、がんゲノム情報による薬剤の使い分けは肺癌領域で特に先行していましたが、次世代シーケンサー（NGS：Next Generation Sequencing）と呼ばれる遺伝子解析器を用いた遺伝子パネル検査で多種多様な遺伝子を数百の単位で網羅的に短期間に調べることが可能になりました。この結果、個人個人に最適な薬剤を選択する試みが、がんゲノム医療の大きな柱となっています。現在、がん遺伝子パネル検査を行うことで、薬剤投与までに至る患者さんの割合が10-20%であると報告されていますが、薬剤を投与するにあたっても適応外使用であれば高額な医療費になることが想定され、がんゲノム医療を取り巻く壁が高いことも事実です。

大阪医科大学附属病院は、2018年にがんゲノム医療連携病院に指定され、がんゲノム医療中核拠点病院の京都大学、大阪大学と連携し、エキスパートパネル（各領域の専門家からなるNGS検査結果の検討会）に参加し先進医療（研究段階の医療）として、患者さんに効果的な治療法を提供すべく、がんゲノム医療の経験を積んできています。また、遺伝性腫瘍の関連遺伝子の検出も想定されるため、臨床遺伝専門医、遺伝カウンセラーを充実させ、ゲノム情報の適切な管理を行うためにがんゲノム医療管理室を2019年4月より設置し、来たるがんゲノム医療の本格稼働に着々と準備を進めております。がん遺伝子パネル検査を希望される場合には、主治医と、がん遺伝子パネル検査の有用性と限界、遺伝性腫瘍関連遺伝子が検出された場合のこと、医療費のことなどよくご相談なさってください。がんゲノム医療の諸課題を患者さんとともに解決しながら、個人個人に応じた医療を提供できればと考えています。

市民公開講座

2019年6月15日開催

「かゆみ疾患治療新時代～アトピー性皮膚炎と蕁麻疹を中心に～」

皮膚科学教室 講師　谷崎 英昭

はじめに

「かゆみ」に悩む患者さんが受診する科として頭に浮かぶのは「皮膚科」だと思います。6月の市民講座では、アトピー性皮膚炎と蕁麻疹のかゆみを中心に病気のなりたちと治療について講演させていただきました。

アトピー性皮膚炎の痒み治療

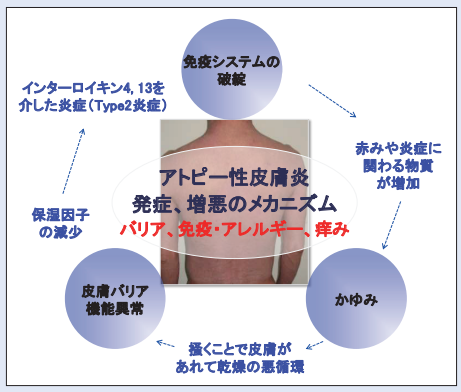
外来患者の約10%を占めます。病気の成り立ちとして、乾燥肌、アレルギー炎症、かゆみの3つの要因が相互に影響を及ぼしあうことがわかっています。外用治療や保湿剤が治療の中心となることは間違いないのですが、昨年発売された治療薬の効果からもインターロイキン-4, 13という炎症物質がその中心的役割を果たすことが見直されつつあり、症状のコントロールが困難な患者さんにとって大きな治療の転換点をむかえています。

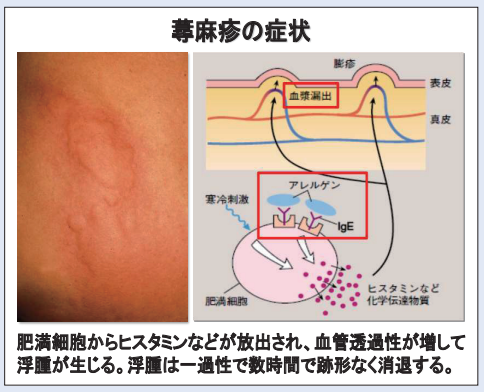
蕁麻疹の痒み治療

外来患者の約2-3%を占め、強いかゆみを自覚します。アレルギーの原因が何かあるはずと考えがちですが、原因のわかる症例は10%程度にすぎず、個人個人の背景要因があるところに感染などの誘因が加わることによって病気がおこります。その主役はヒスタミンという物質で抗ヒスタミン薬を内服することで早期に治癒する患者さんも多いのですが、症状が長びく症例には、IgEという物質を止める治療薬を投与することで、かゆみスイッチが入らないようにすることが可能となりつつあります。

終わりに

アトピー性皮膚炎･蕁麻疹患者さんは強いかゆみに悩まされています。病気の根本をおさえる新規治療薬の効果は大きく、患者さんをかゆみから解放することへの期待も膨らみます。しかし、外用治療や内服治療の基本をしっかり行うことが大前提であることに違いはなく、痒み治療は患者さん個々への治療方針をしっかり検討して行う時代に入りつつあるのです。





肥満細胞からヒスタミンなどが放出され、血管透過性が増して浮腫が生じる。浮腫は一過性で数時間で跡形なく消退する。

TOPICS

食物アレルギー対応食 料理コンテストで審査員特別賞を受賞しました

栄養部調理師　青木勝利

食物アレルギーのある方やそのご家族にとっては、アレルギー食を自ら考え作ることが日常です。アレルギーのない人と同じように食べたいという気持ちを少しでも満たせるように、今回卵を使わない「なんちゃって卵焼き」を作りました。詳しいレシピはニッポンハム、食の未来財団のホームページにアップされます。これからも色々なレシピを考えていきたいと思います。

ボランティア活動報告

3月28日(木)「ピアノの広場♪」と銘打ち65病棟の患者さんやご家族に童謡、アニメ主題歌などの曲を演奏し、好評を博しました。

小児病棟での活動

ボランティア支援室では小児病棟における行事のサポートをしております。

主なものは、

①「お話しの国」

②「しまたんのるんるん広場」

③「はまちゃんのバルーンアート」

④ ピアノ演奏

です。

病院ボランティアをしてみようと思われる方、見学に来てみませんか？

ご希望の方はお問い合わせください。

【問い合わせ先】ボランティア支援室

【電話】072-684-7230　【メールアドレス】volunty@osaka-med.ne.jp

看護スペシャリスト vol.18

専門看護師・認定看護師の活動

お子さんとご家族が笑顔で過ごせるために

小児看護専門看護師　赤松 志麻

小児看護専門看護師の役割は、子どもたちが健やかに成長･発達していけるように療養生活を支援することです。お子さんとご家族にとって急な発病や必要となる検査、治療は不安で怖いことであり、苦痛を伴うこともあります。そのため、病気や検査、治療について年齢に合わせた説明を行い、お子さんが納得して医療を受けることを大切にしています。そして辛い闘病生活をお子さんとご家族が笑顔で過ごせるように支えたいと思っています。

また、病気を持つお子さんだけではなく、ご家族が病気で入院することになったお子さんに対しても支援をしています。子どもは、どんなに幼い年齢であってもとても家族の事を心配しています。そんなお子さんの心配事を軽減できるようにご家族と一緒に支援させて頂きたいと思っています。

何かお困りのことがありましたらどんなことでもご相談ください。

「大学病院新本館」建築ニュース

病院新本館建築始まる

2027年に大阪医科大学が創立100年を迎えるにあたり、その記念事業として現在と同じ高槻の地で現地建替えによる病院新本館を建築いたします。病院新本館は、A棟とB棟を連ねる地上12階、地下1階建ての免震建築物であり、工事期間は第1期工事･第2期工事に分けて実施いたします。本年６月初旬より解体工事がスタートしており、工事車両の通行や西側廊下の一部通行止め、喫茶室の閉店等で皆様にはご不便をおかけして申し訳ございませんが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

大学病院の建て替えに際しては「超スマート医療を提供する大学病院」を基本方針といたします。さらに、スローガンとしては、「つなぐ、ひろがる、未来へつづく超スマート病院づくり」とし、下記の目標を達成すべく建設会社と共に本院職員が意見を出し合い検討しております。

- 高度先進医療とチーム医療の実践
- 安全で快適な医療環境の整備
- 大学病院と在宅医療をつなぐ地域包括ケアシステムの活用
- 人間性豊かな良質の医療人の育成

今後も、皆様方により一層満足して頂ける先端的な質の高い、安心･安全な医療が提供できるよう大学病院として地域に根差した医療を推し進めて参ります。